

月刊

2015

10  
月号

# みんぱく



東日本大震災の  
避難所が教えて  
くれるもの

竹沢尚一郎

特集

# 混住

シエアされる心地よさ  
— 英国のシエア居住

成定洋子

コンタクト・ゾーン  
としてのシエアハウス

田中雅一

海の上の  
研究室

大森裕子

困龍屋での混住生活

河合洋尚

# 湯気の向こうに

静けさが支配する食卓だった。食卓を囲んでいるのは九名のおじさん達で、並んでいるメニューは赤飯・鯛塩焼き・だし巻き・煮物と言った、祝いの膳と呼称した方がふさわしい食卓である。これが日本だと「無口な人達の膳」でくくられるだろう。しかし会話もなく食事をしている場所が、平均気温マイナス五七度、記録最低気温マイナス七九・八度、海拔三八〇メートル、南極の内陸約一〇〇キロに位置する「ドーム基地」となったら事態は一気にドラマティックになっていく。

南極観測船「しらせ」では、南極大陸に向けて出港した夕食に赤飯弁当が供食される。それが日本では最後の食事と言うことで、観測隊諸氏は大事にゆつくりと食べていた。調理担当の自分はそのことを思いだし、迎える「しらせ」が晴海埠頭を出港したちょうど二年後の二月二十四日、このメニューを再現したわけである。細菌はおろかウイルスさえも生存できないすさまじい環境で、九名の隊員達は、黙々と観測及び維持活動に従事していた。日中はそれぞれの活動をしているから、顔を合わせることもまれで、それが一堂に会する夕食は一日を締めくくると大切な行事でもあった。その時間に一年前に食べたメニューが出てくるのである。

## 西村 淳

プロフィール  
1952年北海道生まれ。海上保安庁在任中に、第30次南極観測隊、第38次南極観測隊に調理担当として参加。その経歴をもとに、エッセイ『面白南極料理人』シリーズ（新潮文庫）を執筆。2009年に沖田修一監督により映画化。巡視船（へんくう）の教官として後輩を教育したあと、北海道へ戻り、食をとおしてさまざまなコミュニケーションを図る「オーロラキッチン」を設立。執筆業に加え、講演会、メディア出演、フードプロデュースなど多方面で活躍中。

自分の考えた絵図は、一同登場↓再現メニュー↓越冬の終わりを実感↓歓喜↓「西村君さすが！ 気配りの人！ しらせの再現弁当とは嬉しいなあ！」 ↓乾杯↓大騒ぎとなるはずだった。それが咀嚼音しか聞こえない食卓である。正直戸惑ってしまった。

「なんと情緒の無い連中だ。他人の真心に気がつかないなんて」心の中でブツブツ言いながら海老の吸い物を口に入れた時、それは起きた。湯気の向こうに家族が現れたのである。正確に言ううと一年前のメニューを口に含んだ瞬間、意識は二万五〇〇〇キロを飛翔し、我が心に晴海埠頭で手を折れんがばかり見送ってくれた妻が娘が家族達が、まざまざと投影された。他の隊員達とは見ると、彼らの意識も食べているであろうこの場所が、南極大陸の奥地「ドーム基地」ではなかった。それぞれの隊員の魂とか意識はすでに浮揚し、大切な人達の所に帰ってしまったことが本当に実感できた。それが先述した咀嚼音が支配する、静かな食卓につながっていったと思われる。

食事のメニューで魂が既視感を起こしたのか今となつては不明だが、場所は共有しているのに意識は別々と言う、食卓の湯気の向こうで起きた、不思議な不思議な出来事だった。

## 月刊 みんなく

10月号日次

- |   |   |
|---|---|
| <p>1 エッセイ 千字文<br/>湯気の向こうに<br/>西村 淳</p> <p><b>特集 混住</b></p> <p>2 コンタクト・ゾーンとしてのシェアハウス<br/>田中 雅一</p> <p>4 シェアされる心地よさ——英国のシェア居住<br/>成定 洋子</p> <p>5 海の上の研究室<br/>大森 裕子</p> <p>7 困龍屋での混住生活<br/>河合 洋尚</p> <p>8 東日本大震災の避難所が教えてくれるもの<br/>竹沢 尚一郎</p> <p>10 集めてみました世界の〇〇<br/>まくら編<br/>丹羽 典生</p> | <p>12 みんなく Information</p> <p>14 味の根っこ<br/>アドボ<br/>永田 貴聖</p> <p>16 文化遺産おもてうら<br/>「食」の文化遺産<br/>——和食とキムジャン<br/>朝倉 敏夫</p> <p>18 音の居場所<br/>震災と音楽<br/>中村 美亜</p> <p>20 人間学のキーワード<br/>フード・セキュリティ<br/>栗本 英世</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|---|

# 特集 混住

家族でない他人同士が住まいをともにし、居間やトイレ、台所、風呂など、日常空間を共有するとき、なにが起こるのか。シェアハウスや避難所、集合住宅、あるいは船のような閉鎖空間を舞台に、そこで生まれる人間関係や問題、個人の価値観の変化、空間の変化などに注目する。

## コンタクト・ゾーンとしてのシェアハウス

### 毎日が合宿

シェアハウスが急増している。それように改築された家屋や新築家屋、または家族用に建てられた一軒家やマンションの一室に、水回り施設や居間を数人で共用しつつ住むという居住形態である。シェアハウス急増の背景には、会社に勤め結婚して核家族を形成し、ローンを組んで二戸建てをもつという、高度経済成長を前提としたマイホーム主義の崩壊という現実が存在する。結婚しないで仕事を続ける女性も増えている。不況の時代、都市で独身生活をおくる人間にとって家賃が安いというのは魅力であろう。シェアハウスに住む動機は経済的なものが大きいかもしれないが、それだけでは終わらない。シェアハウスには、安さとは別の面白さがある。急増に伴ってトラブルも増え

ているかもしれないが、以下ではシェアハウスの意義を積極的に考えてみたい。

昨年、住総研の助成を受けて、シェアハウス関係者にインタビューをおこない、その実態を見学する機会があった（研究NO.108 実施期間二〇一三年六月〜二〇一四年一〇月、代表・田中雅一）。そのなかで特に注目したいのは、個室がなく、住人全員が二段ベッドに寝るタイプの、若者の自立を支援するシェアハウスである。その種のシェアハウス体験で語られることが多かったのは、一緒に住んでいて楽しい、帰宅すると誰かいて安心、など同居人に関することである。ある男性は「毎日が合宿、毎日寝不足」と語る。

### 背中を押す

悩みを相談するような場面も生じるが、必

ずしも非常に親しくなった者同士のあいだでのみ生じるとは限らない。閑だからいつも人の悩みを聞き続けているうちに、自分の一言がときには相手の「背中を押す」力をもつことに気づいたと語る学生もいた。相談した側にとっては、ちょっとしたきっかけが得られたということにすぎないのかもしれない。これをきっかけに二人が親しい友人になったりするわけでもなく、背中を押された者は、ハウスからさっと飛び立って行くのである。しかし、自分の一言がある一瞬でも力をもったという体験によって、助言者は、それまでにはなかった自信を得ることになる。このように、一日中一緒にいて濃密な関係が生まれ、そこで強い力をおよぼし合うという関係ではなく、弱い関係のなかでそれぞれが変化していくところが、この種のシェアハウスの特徴なのである。それは、オウムに代表されるような疑似家族的な組織を指しているわけではない。むしろ、そのような組織を拒否する、「ポスト・オウム時代」にふさわしい実践である。

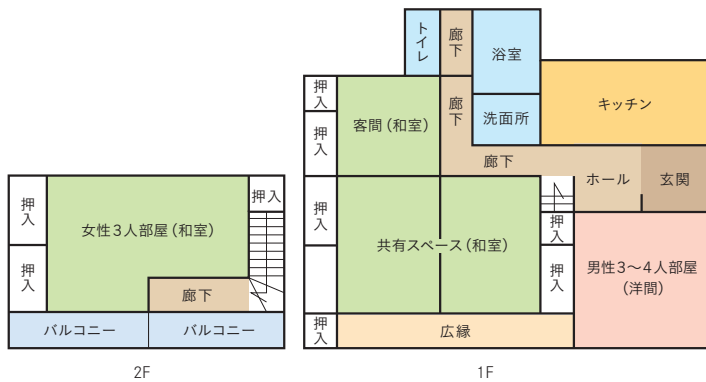
### 飛び出す者とはみ出た者

ハウスはたんに生活する場所であるだけでなく、イベント会場を兼ねた活動の場となり、情報の発信源となっていた。ハウス内では、異業種交流を目的とするイベントが盛んにおこなわれていた。イベント情報はネットで活発に発信され、外部からの参加も多い。また、居住者の出入りも激しいため、共同生活をおくる過程でじっくり深い関係を築き上げていくと

いうより、どちらかというところ、流動的でゆるいネットワークが生まれている。ある居住者はこれを「ワン・ステップ」（次の段階への第一歩）と表現する。

このようなシェアハウスの活動を利用しながら、既存の会社から飛び出して起業しようとしている者がいる一方、家庭や学校、会社の人間関係になじめず社会からはみ出してしまった者もいる。しかし、「飛び出し組」と「はみ出し組」に、そんなに違いがあるようには思えない。既存の学校教育の枠組みでは生かされなかった自分の興味や特技を、シェアハウスに身を寄せることで自分のペースでこつこつ発展させ、それが注目され評価され、仕事につながることもあるからだ。

世間ではエリートとみなされてもいい職種についていたある青年は、あるとき絶望的な気持ちでシェアハウスを訪れた。助けを求めるともりだったのだ。ところがそこで、自分よりほどこいっていない者たちを見て、もっと自分にはできることがあるのではないかと、何だかすこくやる気がわいてきてしまったという。期せずして、それまでの人生のなかで交わる機会がなかった人びとに触れることができ、あらたな視点をもち、さらに実行に移した事例である。ここに弱いネットワーク形成という「混住」をめぐる、若者たちの新しい動きを感じる。シェアハウスは、現代社会に生まれた、小さいけれど、大きな可能性を秘めたコンタクト・ゾーンなのだ。



一軒家を利用したシェアハウスの間取り図



上：トラブルを防ぐためのさまざまな注意事項が貼られている。中：英語学習をコンセプトに掲げるシェアハウスでは、外国人講師によるレッスンも受けられる。下：規模によっては共有スペースの設備が複数置かれていることもある。（写真提供・企画運営：株式会社シェアスタイル、物件名：ARDEN新宿/ARDEN南行徳）

# シエアされる心地よさ — 英国のシエア居住

なりきだ ようこ  
成定 洋子 沖縄大学教授

夜は、一緒にパブに行ったりして、とつても遅くに一緒に帰ってきた。翌朝には、一緒にカフェに朝食に行つて、前の晩のことで大笑いして。社会的に同じリズムだった。個人の生活はシエアされているけど、シエアされていることが心地よい感じ。

(Aさん、イングランド出身、三〇代前半、女性、大学院生)。

Aさんは、一八歳のときに初めてシエア居住を経験し、その後十数年間、ロンドンを中心に計一六回に渡るさまざまな形態のシエア居住をおこなってきた。英国の単身用アパートの家賃は高く、所得の低い学生や若者が自活して一人住まいすることは難しいため、シエア居住が習慣化している。シエア居住では、個室を各人がもちつつ、居間や台所、風呂場やトイレを共有することが多い。Aさんにとつても、シエア居住は、経済的な理由から必要に迫られたものであったが、友人二人との大学三年生のときに経験した、今までもっとも楽しかったシエア居住について、「シエアされていることが心地よい感じ」と話す。

単身世帯比率がもっとも多く、全世界の三

間などとともに「シエア」したり・されたりしながら、他者との関係性を作つていく、互いに「関係的」な存在であるように見受けられるのである。そして、そこに「心地よさ」が生まれるのだ。

## 「個」を作り出す関係性

Aさんは、シエア居住とは、他者と居心地良

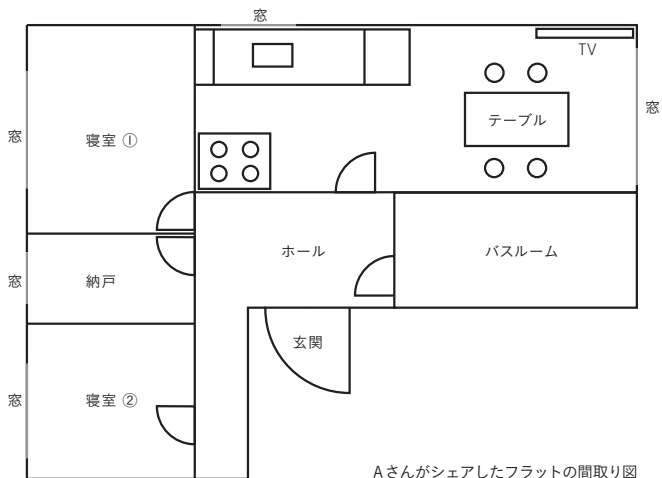
分の一以上を占める日本において、英国におけるシエア居住はなかなか理解しにくい暮らし方かもしれない。しかし、果たして、Aさんのいう「シエアされる」「心地よさ」とは、どのようなものなのだろうか。

## わたしは他者と暮らせる

わたしは、二〇一三年に、Aさんを含む、英国におけるシエア居住経験者にインタビュー調査をおこなった(住総研究助成No.1303による)。印象的だったのは、ほとんどの人たちが、経済的に可能であるならば、シエア居住よりも一人暮らしやパートナーとの二人暮らしを好む一方で、同時に、ほぼ全員が、家族や恋人以外の他者と一緒に、自分が暮らせると強調したことだった。このことは、若者のシエア居住が一般化している英国社会において、シエア居住を問題なく楽しくできたという経験的事実が多様な他者とうまくやっていくことのできる社交性やコミュニケーション力を示す重要な指標であることを示しているように思われた。

一般に、英国は、「個人主義的」で「自律した個人」を重視する西洋社会の代表例としてみなされがちである。しかし、Aさんのようなく暮らすためにどうしたらいいのかについて学び考える「学習過程」だという。相互に「シエア」される関係性は、人生を生きていくうえで必要不可欠なものとして語られる。そして、恐らく、その根幹に、彼女にとつても、もっとも楽しく成功した他者とのシエア居住経験があり、そこでの「心地よさ」は、さまざまな形や関係性による共生という実践を可能にする、

シエア居住の実践は、むしろ「関係的」な人びとのあり方を印象付ける。つまり、人びとは、それぞれ一人で、「自律した個人」であるというよりは、さまざまなモノや空間、感情、時



Aさんがシエアしたフラットの間取り図

大切な感覚として存在し続けるものであるように思われる。このような暮らし方や関係性を、家族をめぐる既存概念や社会規範に對置させるのではなく、家族や恋人、友人関係などと連なりながら、他者とともに「個」を作つていくものとして考えることで、「自律」概念を問い直しつつ、住環境と住生活にかかわる可能性を探ることができるとは思えないだろうか。

# 海の上の研究室



学術研究船「白鳳丸」

## 研究航海船

見渡す限り真っ青な海と白い波、はるか先には水平線が広がり、その先を見上げて青い空と白い雲が広がる。研究船が出港してから半日も経たずして、周りは青と白でできた景色になる。外洋にいく研究航海では、水や食料、燃料の補給のために寄港地に立ち寄るまで、約三週間は海の上で過ごす。そのあいだ、研究者・学生は、協力しながら現場の観測をおこない、共同生活を送る。

おおもり ゆうこ  
大森 裕子 筑波大学大学院助教

わたしがお世話になった船は、海洋研究開発機構が所有する学術研究船「白鳳丸」という、重さ三九九一トン、長さ一〇〇メートルの大きな研究船である。その大きさは伝わりにくいかもしれないが、一〇の研究室をもち、研究者三名・乗組員五四名の最大八九名が生活する

地上五階、地下一階建ての船、といえは想像できるだろうか。五階建てのうち、一階は食堂、倉庫、船員の居室、二階は研究者の居室、三、四階は船長や上席研究者の食堂や居住区、五階は操舵室(たうた)になっている。そして各階には、研究室が二〜三個ずつあり、大気や海水、生物などにかかわるさまざまな研究テーマに応じた実験・観測がおこなわれる。

若手研究者や学生は、基本的に二人部屋の居室で過ごす。約五帖のカーペットの部屋に、二段ベッド、二つの机、冷蔵庫、テレビ、洗面台とソファがあり、ベッドと机以外は同室の人と共有する。お風呂(女性はシャワー室・トイレは共同、朝昼晩は一階の食堂で船のコックさんが作ってくれる美味しい食事を皆と一緒に食べる。さながら、部活の合宿のような生活を送る。

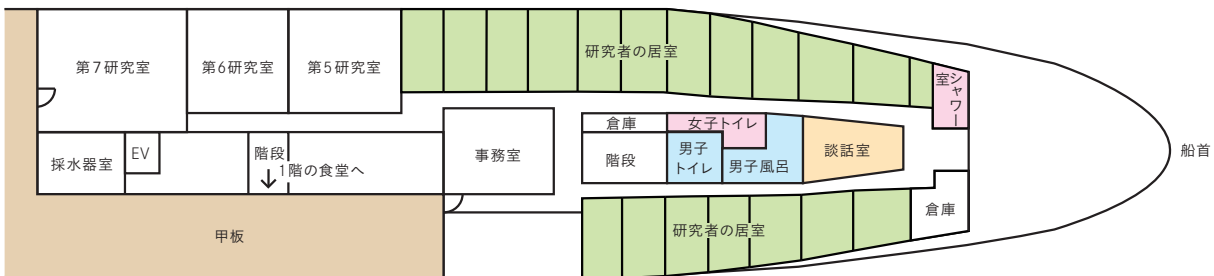
過酷で楽しい航海生活

船の上の一日は、観測スケジュール中心に動く。昼夜問わず、観測点に到着したら、海水を採取し処理・実験をおこなう。観測終了後は次の観測点に到着するまでひと休み。観測点に到着したら、またすぐに観測開始。そのあいだに朝・昼・晩のごはんチャイムが鳴ると、食堂に集まりご飯をいただく。食後も、作業があればすぐに現場に戻る。規則正しいのは食事の時間だけで、観測に支配される生活は寝る間もなくくらくらいハードで不規則だ。

観測がない日は、オフの時間を思いっきり楽しむ。陸地で買い込んだお菓子でお茶会を開いたり、夜は誰かの居室に集まって飲み会を開いたり。航海で毎回体重が三キロ増えてしまうのは、このせいだと思いが、観測の疲れを忘れるために食べて飲んでよく笑う。船の上では、ハードな観測とともに乗り越え、休息日もともに楽しむのだ。

ないものだらけの海上

観測中もプライベートの時間も他人と空間を共有して過ごすため、自分だけの時間・空間がわずかしかない。本当に一人になれる場所は、カーテンを閉めたベッドの上のみである。このことを「辛い」と感じてしまうと、海の上なので真正銘逃げ場がないが、観測でハードな日が続くとそんなことを感じるヒマもない。わたしはいつでも起きられるように、ソファで寝ていた。たまにベッドの上で寝られるだけで幸せを感じる日々は、プライベートの時間や空間がないことを忘れさせてくれる。



第2甲板 (研究者の居住スペースと3つの研究室)



太平洋亜熱帯域の夕暮れ



2人部屋の居室



研究者・学生総出で海水採取

陸から離れて隔離された船上は、コンビニもなく、インターネットは使えず(メールはできるが)、モノも情報も制限された環境である。そんななかで三週間毎日同メンバーと一緒に仕事をして生活することは、一見辛く退屈に感じるかもしれない。最初、わたしも途中で帰

たくなるのではと思っていた。しかし、日々同じ釜の飯を食べ、大変な観測を乗り越えることで、共有できる情報や経験が増え、退屈になるどころか船内での生活は楽しく過ごしやす環境に変化していく。観測が終わるときには、皆と過ごした生活が名残惜しくて、まる

で船中毒にかかったように次の航海を心待ちにしてしまう。空間も情報も他人と共有する船生活は、そこにあるもので満足できること、共有することで制限を超えられることを教えてくれる。こんな生活に少しでも興味があれば、ぜひとも一度は乗ってみていただきたい。

困龍屋での混住生活



困龍屋の外観

中国の集合住宅

中国広東省の東北部にある客家の町・梅県。ここには困龍屋とよばれる集合住宅が分布している。伝統的に困龍屋は共通の祖先をもつ一族の住居であり、血のつながりのない人は住むことが許されなかった。しかし、ここ三〇年間、生活水準が向上し、一族の人びとが近くの新しい住宅に移り住むと、血縁関係のない人が困龍屋の部屋を借りるようになった。困龍屋は近年、さまざまな出身の者が混住する集合住宅へと変わっている。

希薄な隣人関係

わたしは、梅県滞在期間中(二〇〇五年〜二〇〇八年)、市内の困龍屋のひとつに住んで調査をしていた。わたしが住んだ困龍屋には、農村から来た一族の親戚や、省外からの出稼ぎ労働者などが共住していた。当時、困龍屋の家賃は一月八〇元(当時約二〇〇円)と外のア

河合 洋尚 民博 研究戦略センター

パートの五分の程度であったため、おもに収入の少ない住民で占められていた。寮生活から抜け出し、困龍屋で同棲する大学生のカップルも多かった。

混住生活というと、同居者が助け合ったりトラブルを起こしたりする情景を思い浮かべるかもしれない。だが、困龍屋の住民は入れ替わりが激しく、互いに無関心で、トラブルも少なかった。中国のマンションでは、隣人であっても名前も知らず、あいさつするだけといった状況がよくみられる。赤の他人が混住する困龍屋は、ちよつどそんな感じであった。

トイレと風水

居住者の接触が少ない要因のひとつは、困龍屋の空間の使い方にある。困龍屋は、中軸線上にある化胎、上庁、中庁、下庁が公共の空間になっているが、ここは所有者である一族が祖先崇拝や葬式をする空間でもある。居住

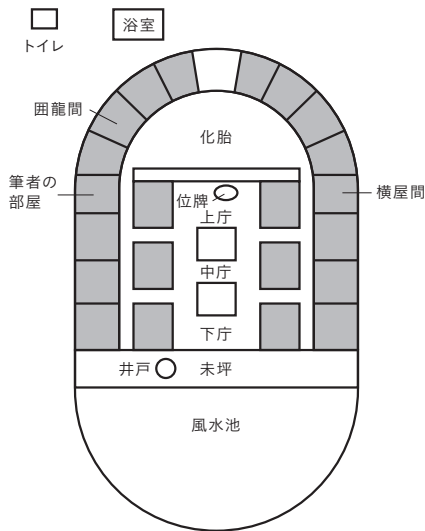
者もこのことを見聞きしているため、公共の空間を日頃使うことは少ない。また、共有の台所もなく、居住者は各部屋で料理をつくる。居住者が共同で利用するのは、一部の女性が洗濯で使う井戸、囲龍屋の外に設置された浴室やトイレくらいである。



上：田龍屋の部屋  
中：田龍屋前の井戸で洗濯をする居住者  
下：祖先の位牌を置いている上戸

わたし自身の生活で悩みの種であったのは、一族が囲龍屋を改造した際、水洗トイレを囲龍屋の外に設置したことであった。部屋からトイレに行くまでには犬がおり、特に夜間は吠えるのでトイレに行くのも一苦労であった。大家の話では、トイレを囲龍屋の外に設置するのは風

水のためである。彼らは水を財と考えるため、水洗トイレを内部に設置すると一族の財が逃げてしまうというのである。住民にとってはいい迷惑であるが、彼らにすれば命運を左右する譲れない部分なのである。



客家の田龍屋平面図。グレーの部分が居住できる部屋。化胎は子宮を模した高台であり、生命エネルギーの根源とみなされている

## 東日本大震災の避難所が 教えてくれるもの

ホームがストリートになるとき

東日本大震災は甚大な被害を出しただけに、家を失った被災者を多く生み出した。避難所に避難した方は、最大で三六万人を超えるという未聞の数字であった。「ストリートの人類学」を提唱する関根康正氏風にいえば、被災地で

はストリートとホームの区別が失われ、多くの人びとは長い場合には半年にわたってストリートで寝食することを余儀なくされたのである。ストリートといっても、長期にわたって過ごすのだから、求められる技法があり、求められる資源があるはずだ。どのような資源であ

竹沢尚一郎

民博民族文化研究部

り、どのような技法であるのか。わたしが被災直後から通ってきた岩手県大槌町の避難所を見ながら、考えていこう。

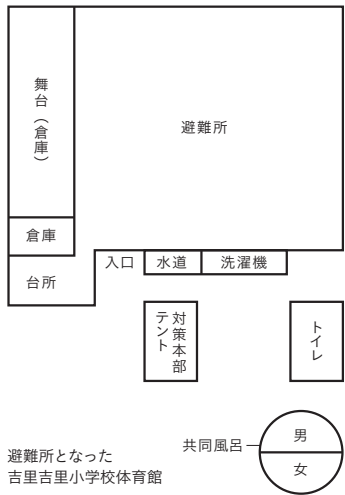
### 避難所の運営の仕方

ひとつのケースは、大槌町中心部、城山の中央公民館の避難所である。大槌町では市街地の六〇パーセントが津波によって破壊された

ため、町内の各地区から一〇〇〇名を超える避難者がここに避難してきた。各地区からバラバラに避難した人びとの集まりであったので、被災者が話し合っただけで災害対策本部を立ち上げることも、有志による炊き出しがおこなわれることもなかった。そのため、避難者は一日一回、自衛隊が用意した食事を口にできただけであつた。避難者は孤立したまま、猜疑心と警戒のなかで数ヶ月を過ごしたのである。

これと対照的なのが、吉里吉里集落の避難所であつた。この集落もまた約半数の住宅が被災し、五〇〇人を超える避難者が生まれた。反面、この地区には小学校が二校、中学校が一校あるだけなので、避難者はほぼ全員が同窓生であり、被災前からたがいに知っていた。そのため、被災の日々には対策本部を立ち上げ、役員を決めたほか、女性陣が食料を集めて炊き出しをおこなうこと、男性陣ががれきを撤去し、暖房を確保し、夜警をすることを決めたのだ。

わたしはこのふたつを含めた大槌町の十数



避難所となった  
吉里吉里小学校体育館

カ所の避難所を訪れたが、中央公民館をはじめめとするいくつかの避難所ではピリピリした雰囲気があり、訪れるのにためらいがあつたことを思い出す。それに対し、吉里吉里地区のようないくつかの避難所では、一軒の大きな家のような雰囲気があり、子どもたちも緊張とは無縁でボール遊びをしたり、鉄棒にぶら下がっていたりしているのだ。あるとき、神戸市のNPO団体から木製の簡易間仕切りが送られてきた。阪神淡路大震災のときに、プライバシー保護の目的で大変重宝されたという触れ込みであつた。ところが、この避難民は話し合った結果、「こんなものはいらない」といって共同風呂のたき付けにしまったのだ。

### 浮かび上がる社会資本

避難者の手になる対策本部が立ち上がったところ、立ち上がらなかつたところ。和気藹々とした雰囲気を生んだところ、緊張が薄れなかつたところ。そうした違いは何に由来するのだろうか。

わたしは先に、大災害はストリートとホームの区別を失わせるといったが、そのときに浮かび上がってくるのは、その社会が被災前にどのような人間関係を作り上げ、社会資本を築いていたかといふことである。それは、日常生活のなかではホームという枠組みに隠れて見えないが、ホームが失われたときにむき出しになってくるものなのだ。

もっとも、吉里吉里のようなケースは今日のわが国では希であり、参考にはならないという

異議も可能である。わたしもその批判に同意する。反面、まったく社会資本のない地域社会を想像することも困難である。地域には、町内会や商店街、消防団などの旧来の組織から、NPOやスポーツ団体などの新しい組織まで、いくつもの集団が存在するのが普通である。であれば、それらのあいだで日常時に連携をとっておいたなら、いざというときに一定のゆるやかなコミュニティとして機能することも可能だろう。

わたしは講演を頼まれると、三・三・三を目安に行動してくださいと言っている。三日、三週、三月の謂である。どんな大災害でも三日以内には自衛隊が救援に来てくれるので、三日のサバイバルの覚悟をしておけばよい。その後避難所に入ったなら、三週間は他を頼らず、避難者同士で全部をやり抜く覚悟をしておくこと。そして、避難所での暮らしが三ヶ月続くという覚悟をしていくことである。



被災翌日の大槌町中心部。電線が垂れ下がり、いたるところで火が出ているので、自衛隊の救援が2日入らないところもあつた

### ブルガリア

羊毛で文様を織り出してある。女性は立派な寝具を結婚前に準備する。特に、枕と掛け布には、装飾が凝らされている。

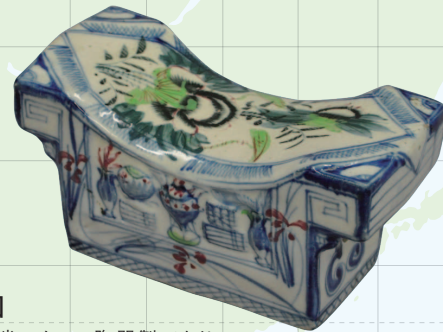
W81 x D33  
H0064073



### 中国

新疆ウイグル自治区で作成されたもの。中に衣服などを詰め込み使用した。

H18 x W78 x D46  
H0207601



### 中国

山東省のもの。陶器製であり、現地語で瓷枕と記載する。中に水を入れて涼感を楽しむ。中国では7世紀ころからすでに使用されていたという。

H12 x W25 x D12  
H0130171



### クウェート

居間に置かれ、ひじ掛けとしても用いられた。くつろぐだけではなく、この枕にもたれつつ、タバコ、コーヒー、紅茶が楽しめる。

H20 x W61 x D42  
H0100384

### 日本(青森)

明治から大正時代にかけて三戸(さんのへ)で使用された。麻布の袋の中にソバ殻を入れてある。三角おむすびのような形状は安定をよくするため安土型という。そこを丸くして使用者が寝返りを打ちやすくする型もある。

H18 x W28 x D12  
H0229511



### 朝鮮半島

抱き枕の一種。暑くて寝苦しいときに使用された。今ではあまり使われず、お土産物として売られている。竹夫人ともよばれる。

H20 x W19.7 x D118.5  
L513



## 集めてみました世界の



にわ のりお 民博 研究戦略センター

枕とは寝るときに頭を乗せる寝具である。頭を沈み込めるようにして頬と枕が合わさるように使う、ゆったりした枕があるかと思えば、武骨な一本木のかたい枕もある。寝心地はもとより、枕を交わしたり、寝物語(ピロートーク)に花咲かせるには、不向きでないのかといらぬ心配もしたくなるが、膝枕から腕枕まで、いろいろすべはあるのであろう。ただ枕投げには、ぜひとも柔らかいのを使っていたきたい。

※寸法の単位はセンチメートルです。

### エチオピア

19世紀末から20世紀初頭につくられたと推定される。成人男性が日常的にもち運び、枕兼椅子として使用する。牧畜の生活様式と関連がある。

H14 x W16 x D9.7  
H0210813



### ケニア

ソマリの人が使用する木枕。同様の形態はザイール(現在のコンゴ民主共和国)でも見られる。アフリカの枕は概して、背の高いものが多いという。

H19 x W15 x D8.4  
H0007281

### 日本(長崎)

沖へ出て漁をする際の煙草入れや道具箱で枕のかわりとして、漁師によって使われていた。つね日頃、もち歩き、自宅と船のどちらでも使用されていた。

H14 x W13 x D27  
H0159142



### トンガ

19世紀後半に使用されていた一木づくり。頭部は超自然的な力が宿る聖なる場所とされていた。柔らかい枕より心地よいとする老人もいる。

H17 x W43 x D14  
H0138667



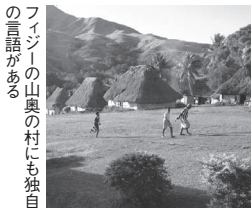
特別展

「わがちあい・おもてなしのかたち」
韓国交正常化50周年を記念して、韓国国立民俗博物館と共同で開催します。

関連イベント

「ワークショップ
香りの体験「オリジナル七味づくり」
日時 10月3日(土) ①13時〜14時、②14時30分〜15時30分

「長江京歌」
三狭ダム建設で沈みゆく古都を舞台に、国家



フィジーの山奥の村にも独自の言語がある。

みんなくゼミナル

「言語の遺伝子をたどる——ことばの変化と人の移動」
講師 菊澤律子(本館准教授)

「武器をアートに——モザンビークにおける平和構築」
会期 10月17日(土)〜11月23日(月)

「城壁内からみるイタリア——ジェンダーを問い直す」
陽気・大家族・恋愛に奔放……多くのイメージに囲まれたイタリア。

「息づく仮面——バリ島の仮面舞踊劇トペ」と音楽」
会場 本館講堂(定員450名)

「育兒の人類学：介護の民俗学——フィールドワークによる再発見」
会場 本館講堂(定員40名)

「地球探究紀行」
時間 13時〜14時30分
会場 あへのハルカス近鉄本店「スペース9」

「中央・北アジア、アイヌの文化展示」
展示リニューアル工事のため、中央・北アジア、アイヌの文化展示場を11月18日(水)から3月16日(水)まで閉鎖します。

「武器をアートに——モザンビークにおける平和構築」
会期 10月17日(土)〜11月23日(月)

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 本館第5セミナー室(定員96名)
※当日先着順、会員無料(会員証提示)、一般500円
第448回 11月7日(土)14時〜16時(懇談会含む)

東京講演会

会場 JICA地球ひろば セミナールーム600
定員 60名(要事前申込、会員無料・一般500円)
第114回 10月10日(土)14時〜16時(懇談会含む)

第71回体験セミナー

九州のなかの朝鮮文化を歩く
期間 12月2日(水)、3日(木)
訪問先 佐賀県

第86回民族学研修の旅(要事前申込)
訪問先 メキシコ

刊行物紹介

宇田川妙子 著
『城壁内からみるイタリア——ジェンダーを問い直す』
陽気・大家族・恋愛に奔放……多くのイメージに囲まれたイタリア。



朝倉敏夫、林史樹、守屋亜記子 著
『韓国食文化読本』
特別展「韓日食博——わがちあい・おもてなしのかたち」





# 味の根っこ

フィリピンの歴史がつまった料理

## アドボ

なが た あつまさ 永田 貴聖 民博 機関研究員



日本の家庭で作られた鶏のアドボ (撮影・太田貴)

「シット」などがある。フィリピン人は外から来たものを取り入れ、自分たちのものにしていったのである。

### アドボの由来とフィリピンのアドボ

アドボはもともと肉を漬け焼きしたスペイン料理「アドバード」を起源としているというのが定説である。スペイン語で「アドボ」というのは「酢で漬けこむ」という意味からもわかるように、酢を用いた煮込み料理である。フィリピンのアドボは、豚バラブロック、もしくは鶏の手羽、または両方とともに、玉ねぎ、ジャガイモ、ゆで卵を加え、ココナッツ酢（米酢、穀物酢などでもよい）、醤油、粒こしょう、ローリエを調味料として煮込む。また、魚介類が豊富な地域では、豚や鶏ではなく、イカなど魚介類を使うアドボもある。スペインを起源としながらもフィリピンで採れる材料や調味料を使い、



ゆで卵入りもまた美味しい

### 外から来たものを「フィリピンのもの」にする

豚肉か鶏肉、もしくは両方を合わせて醤油とココナッツ酢で煮込んだフィリピンの代表的な料理のひとつ、アドボはスペインを起源としながらも、約四〇〇年近く、スペイン、アメリカ合衆国、日本などに支配されていたフィリピンの歴史がつまった料理といえるだろう。

約七〇〇もの島々から成り立つ島嶼国家としてのフィリピンの歴史は、一六世紀前半フェルディナンド・マゼラン率いるスペイン艦隊がセブ島の南東部にあるマクタン島に到着することにより始まる。のちに、その島嶼地域は当時のスペイン皇太子・フェリペ二世にちなんで「フィリピン諸島」と名づけられた。それまで、フィリピンには、「船」を意味する多数の「バラングイ」とよばれる統治集団と南部のいくつものムスリム王国があったものの統一国家や王朝が存在しなかった。スペインによる植民地支配のもと、首都マニラは、同じスペイン領内にあるメキシコ・アカプルコ間を結ぶガレオン貿易の拠点として、都市が形成され、多くのスペイン文化が流入した。

また、スペイン到着以前から中国との交易があったため、フィリピンには、生活のなかで、多くの外からのものがある。料理に限ってみても、アドボ以外にも、スペインを起源とする牛肉の煮込み料理「カルデレータ」や、中国からやってきたといわれている揚げ春巻き「ルンピア・シャンハイ」や麺かビーフンを使った「パ」

「フィリピンのアドボ」は作られるのである。また、ある逸話がある。一九四二年から四五年まで統治し、敗走していった日本がフィリピンに多くの醤油を残し、フィリピン人がそれを使ったためアドボが醤油味となったという俗説である。もちろん、フィリピンでは、中国の影響で、古くから調味料として醤油を使っていたこともあり、はたしてどこまで本当の話なのだろうか。

フィリピンだけではなく、アドボと同じ由来をもつ料理は、特にスペインの影響が大きかった地域に多い。例えば、メキシコ北部には、カルネ・アルバータというピリ辛の煮込み料理がある。また、フィリピン系住民が多く、多民族社会のハワイでは、アドボはランチプレートのおかずのひとつになっている。

### 海外、そして日本の家庭でも定番に？

現在、フィリピンは、人口の約一割に相当する約一〇〇〇万人が海外に移住移動している移民送出し国である。日本には約二万人のフィリピン人が居住し、その多くが日本人男性と国際結婚しているフィリピン人女性である。国際結婚夫婦の御宅で夕食を頂くと、アドボが必ずテーブルに並んでいる。ごはんやビールのおつまみには欠かせない一品である。多くのフィリピン人が集まるカトリック教会などのポットラックなどにも必ず誰かが持参する。

フィリピン人の母親をもつ日本とフィリピン



おしゃれに盛られた豚のアドボ



在日フィリピン人同士の食事には欠かせない

の二世たちは、アドボを「おふくろの味」や「わが家の味」として食べている。そう考えると、外から来たものを取り入れ、自分たちの料理になった「アドボ」が日本において、「日本のアドボ」になる日もそう遠くないかもしれない。

### アドボ (4人分)

豚バラブロック	400g
鶏手羽元	8本
玉ねぎ	半分
ジャガイモ (もしくは大根 4分の1程度)	1個
ゆで卵	3個
にんにく	1片
水	200ml
砂糖	大さじ1
酢(ココナッツ酢)	大さじ3
醤油	大さじ4
粒こしょう	小さじ1/2
ローリエの葉	4枚

- ① にんにくと玉ねぎを薄くスライスする。ジャガイモは8分の1程度に切る。豚バラを1〜2cm幅にスライスする。
  - ② 鍋かフライパンに少し油を入れて、にんにく、玉ねぎ、ジャガイモ、豚バラ肉、鶏手羽元を入れ、焼き色がつくまで炒める。
  - ③ 焼き色がついたら水、ゆで卵、すべての調味料を入れ、蓋をして中火〜弱火で30分程度、ときどき返しながらかき混ぜる。
  - ④ 肉が柔らかくなって、煮汁が少し煮詰まったら完成。
- \* 味が濃いので水の量は調節する。  
\* ③の後、圧力鍋などを用いると時間短縮になる。  
\* 酢は米酢、穀物酢またはバルサミコ酢でも可。  
\* ビールやお酒のおつまみとするか、ごはんのおかずとして食べる。

BORDERLESS HERITAGE

# 文化遺産

## おもてうら

BORDERLESS HERITAGE

# 「食」の文化遺産

## 和食とキムジャン

あさくら としお  
朝倉 敏夫  
民博 民族社会研究部

食は、文化的な差異を示すもつとも身近な例である。ナショナル・フードとよべるものは、たいていの国にあることから、自国の食をユネスコ無形文化遺産に認めてもらおうという動きが相次いでいる。

### 同時登録の背景

二〇一三年一月に、日本の和食と韓国のキムチとキムジャン文化が、ユネスコの無形文化遺産として同時に登録された。その三カ月前にソウルで開催された韓国文化財保護財団主催の国際シンポジウム「キムチとキムジャン文化」に招かれたわたくしにとっては、日本と韓国の両国が同時によるこぼしいニュースを聞いたのはうれしいことであつた。

さて、このふたつの「食」の

文化遺産の登録について、あらためて考えてみると、いくつかの共通点が見えてきた。

ひとつは、申請前からの動きである。「食」に関する文化遺産がユネスコ無形文化遺産に登録されたのは、二〇一〇年一月の「フランスの美食術」「地中海料理」「メキシコの伝統料理」が初めである。ユネスコのお膝元であるフランスの力が大きく働いたという。これを受けて日本では二〇一一年七月に農林水産省が「日本食文化の世界

無形文化遺産登録に向けた検討会」を立ち上げたのだが、その座長として舵取りをした本館の熊倉功夫名誉教授によれば、それ以前、小泉政権の二〇〇五年に、アニメやファッションとともに「食」を「日本ブランド」として開発するための提言が出されていたという。一方、韓国においても二〇〇八年に発足した李明博政権は、令夫人が先頭に立って「韓食の世界化」を推進し、キムチの前に宮廷料理の登録を図っていた。両国とも、

申請前から「食」文化の発信要件が整っていたといえよう。ふたつは、和食とキムジャンの特徴である。日本の「和食」は、①多様で新鮮な食材と素材の味わいを活用、②バランスがよく、健康的な食生活、③自然の美しさの表現、④年中行事とのかかわり、を特徴として申請した。これら四つの特徴は、キムチにもほぼ当てはまるが、ことに注目すべきは④である。「和食」の申請書には「正月を例として」という副題がつけられて

められたことになる。

三つは、和食とキムジャンにこめられた精神性である。熊倉は和食の構造とその歴史的变化を図示するための仮説として「和食文化の四面体」を提示している(図)。ここで四面体の頂点に書かれるのは二〇二〇年東京オリンピックの誘致で一躍流行語になった「おもてなし」である。一方、韓国のキムジャンの心は家族・親族や隣近所が共同でキムチを作り、皆でわけ合う精神にある。ことばにすれば「わかちあい」である。わたしは和食における「おもてなし」とキムジャンにおける「わかちあい」という精神こそが無形文化遺産として認定されたのだと考える。

四つは、登録後の啓蒙活動である。日本では、農林水産省が主導して「一般社団法人和食文化国民会議(略称:和食会議)」が設立され、和食文化を次世代に伝える国民運動を展開してい

る。その一環として「日本食文化の魅力シンポジウム」を日本各地で開催しているが、京都府で開催された第一回「学問として伝える、和食」では、わたしが『和食』の無形文化遺産登録を受けて「食文化研究と和食」というタイトルで基調講演をし、龍谷大学、京都府立大学、立命館大学の食文化を学問する各大学の取組みの事例発表がなされた。ユネスコからも登録後にこうした高等教育との連携をもった活動が望まれているという。ちなみに本館でも二〇一四年に追手門大学と共同で「和食は誰のものか?」という公開フォーラムが開催された。『民博通信』一四九号に、その内容を飯田卓准教授が報告しているので参照されたい。

一方、韓国では二〇一〇年に韓国食品開発研究院の付属機関として設立された世界キムチ研究所が、二〇一三年に第一回キムチ学シンポジウムとして

「キムチ、キムジャン文化の人文的学理解」を、二〇一四年に第二回「キムチの人文的学理解」を開催した。わたしは二回とも出席したが、食を文化としてとらえ、人文学からのアプローチを志向したことは刮目に値しよう。

わたしたちの「食」のゆくえ「食」を文化遺産とすることの意義は何なのだろうか。「食」は「生活文化」であり、その根幹である。文化遺産への認定が、失われゆくものを保護するためにあるとするならば、食が文化遺産になることは、わたしたちの「生活文化」が危機的な状況にあるということになる。その意味で、今回の「和食」と「キムチとキムジャン文化」のユネスコ無形文化遺産登録は、わたしたちの生活そのものを見直すためのよい機会であるということとを肝に銘ずるべきであると考ええる。



第1回キムチ学シンポジウムで「日本の漬け物と韓国のキムチ」について発表した

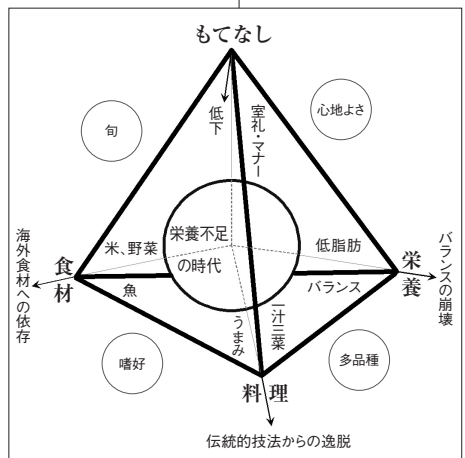


図 和食文化の四面体(熊倉功夫「日本の伝統的食文化としての和食」をもとに作成)

## 震災と音楽

近年、社会の課題に向き合う音楽活動に注目が集まっている。紛争解決、貧困問題、移民受け入れ、自然災害、環境破壊などに対して、音楽は何ができるのだろうか？ 大切なのは、「音楽の力」を過大評価も過小評価もしない冷静な態度だろう。



復興コンサート2014年5月9日（撮影・佐々木隆二）

豊かなものになり、悲しみの感情があらわれ出たと証言している。

一カ月が過ぎると、多くの音楽家が被災地を訪れ、被災者に音楽を届けるようになった。もちろん、なかには、被災地で我儘を言ったり、自分の音楽を被災者に押しついたり、被災の凄まじさにショックを受けたままステージに上がったたりして、被災者から響きを買った人もいた。音楽さえあれば、皆がハッピーになるという単純な話ではない。震災後に作られた数多くの「復興支援ソング」も、すべてがいつも人を元気づけることに寄与したわけではなかった。しかし、被災を思い、こめられた願いは、それが真摯に音を通じて伝えられたとき、人びとの心を動かした。

### 被災地と非被災地を結ぶ

映像や録音技術が向上し、テレビやインターネットが普及した現在では、これまでとは異なる方法で音楽が社会的機能を果たす。震災から一年を経て作られた《花は咲く》は、被災地とそれ以外の地域を結び役割を担った。東北にゆかりのある有名人が次々と登場し、歌の一節を（それぞれのやり方で）心をこめて歌いあげていく《花は咲く》は、被災地から遠く離れたところにいる人びとに、震災はまだ終わっていないことを思い起こさせ、被災者は、自分の人生を振り返りながら、次世代に自分は何を残したのかと問う歌詞に、生き残った自分の複雑な思いを重ね合わせた。東北を離れ避難してきた人たちも、この歌を歌いながら故郷を想った。「〇〇万人の花は咲く」という特設ウェブサイトには、世界中の人たちが創作したユニークな《花は咲く》が投稿され、震災への思いを共有した。

### 人と人をつなぐ

震災から二年が過ぎると、音楽は人々とのかわりを深めるものとして機能し始める。音楽の力による復興センター・東北は、震災で家を失い、転居や仮設暮らしを強いられている高齢者による「みやぎの「花は咲く」合唱団」を結成した。合唱をするのは初めてという多くの団員たちが、仙台フィルハーモニー管弦楽団と一緒に《花は咲く》を歌うことを目標に、練習に励んだ。仙台に移り住んだある老夫婦は、孤立した苦しい日々

「音楽に力がある」ということばが適切であるのかどうかはわからない。だが、東日本大震災後、音楽が被災した人びとの心を癒やし、励まし、「力」を与えることに何らかの貢献をしたことは事実だろう。

### 自分を取り戻す

震災直後には、自衛隊音楽隊のメンバーが被災地で慰問演奏をおこない、地元の学校の吹奏楽部や合唱部が小さな演奏会を開いた。仙台フィルハーモニー管弦楽団のメンバーも、三月末に小規模編成のアンサンブルによる「復興コンサート」を開始した。震災で必要なのは食料や物資、それに復旧に必要な労働力で、音楽など無用だと思われるかもしれない。しかし、日常生活からバックグラウンド・ミュージックが消えた空間で、共同生活で自分一人の時間が失われたときに、緊張が続き身体が硬直しきった状態のなかで、音楽は被災者に自分の素の気持ちを取り戻す機会を与えた。当時、被災地で音楽活動をした人たちは、共通して、聴いている人たちの顔が、音楽を通じて震災前のことを思い出したのか、無表情から表情



コンサートで仙台フィルと歌うみやぎの「花は咲く」合唱団  
2014年4月23日（撮影・佐々木隆二）

を送っていた。田舎から都会に来て、狭いアパート暮らしとなり、以前のように大きな声で話し、気兼ねなく物音を立てることができなくなった。仲間がどこにいるかもわからず、体も動かさなくなっていた。そんなときに合唱団にめぐりあい、歌を始めた。大きな声を出して歌うことは、肉体的にも精神的にもフレッシュになる。《花は咲く》は難しいけれど、毎日練習して、歌えるようになってくるとうれし。生きる喜びを感じる。そうだ。合唱団で仲間もでき、停滞していた生活が音を立てて動き始めた。

音楽に「力」があるのかどうかはわからない。だが、震災後、音楽は思いを伝え、「力」を生み出す契機となった。そして、音楽は人が生きのびるための居場所ともなっている。

なかむら  
中村美亜

九州大学大学院准教授

「セキリティ」ということばは、ふつう安全保障、防護措置や保安措置といった堅い意味あいをもち概念である。個人や国家のレベルで、安全を脅かす脅威を除去したり予防したりすることを意味する。日本語の「安保」は、特に国家のレベルでの、防衛的な軍事的の整備や、友好国との軍事同盟のことを指す。しかしこの語は、もともと一般的に安心や安全を意味している。一九九〇年代前半から国連を中心に使われはじめ、現在は日本政府も開発途上国に対する援助政策の柱として「ヒューマン・セキリティ」（人間の安全保障）のセキリティはこの広い意味である。具体的には、「欠乏からの自由」と「恐怖からの自由」を実現することで、全人類の一人ひとりの人間が、安全に安心して暮らすことができるような世界を創ることを目指している。

フード・セキリティは、ヒューマン・セキリティより遅れて、二一世紀になってから国連機関、国際NGOや各国政府によって使われだした概念である。セキリティは安全保障と訳すしかないで、食料（糧）安全保障と訳されることが多い。個人や世帯、あるいは国家のレベルで、安全で十分な食料をいかに確保するのかを考えるための概念だ。国家のレベルで用いられると、旧来の安全保障の概念に近くなる。たとえば食料自給率が低下し続ける日本において、世界的な人口増加と気候変動および環境の悪化のもとで、近い将来の食料不足が予測されるなか、また輸入のさらなる自由化によって自国の

食卓から  
世界を見る

## 人間学の キーワード

# フード・セキリティ

## Food Security

くりもと えいせい 栗本 英世 大阪大学大学院教授

農業の衰退が目前に迫っているなかで、フード・セキリティをどう確保すべきかという課題は、国家の安全保障の重要な一部である。

他方で、フード・セキリティはヒューマン・セキリティの一部でもある。食べることは、人間の生存にとってもっとも基本的な行為である。よほどの貧困や飢餓状態にない限り、あらゆる人間は毎日なにかを食べている。人間一人ひとりが、安全で十分な食料をどうすれば確保できるのかという問題は、欠乏と恐怖からの自由を考えるうえで、まさに不可欠の要因である。人類学や民族学におけるフード・セキリティの研究は、このヒューマン・セキリティの問題と深くかかわっている。これは古くて新しいテーマである。人類学は、世界各地のさまざまな民族の人たちが、世帯レベルで毎日の食料をいかに獲得し、料理し、食べているのかに注目してデータを収集してきた。今日の世界では、こうした日常生活の実践の細部に注目するデータは、ただちにナショナル、そしてグローバルな次元の問題と結びつく。現在の日本で、わたしたちが、毎日なにを、誰と、どうやって食べているのか想像してみよう。そこには食生活の変化だけでなく、家族の変容やグローバルな食料の生産と流通、消費の動態が集約されてあらわれているはずである。細部に注目することで世界が見えてくる。人類学的なフード・セキリティの研究の面白さはそこにあるといえる。

### 編集後記

今月は「住」に関する特集号なのだが、期せずして食に関する記事も多くなった。住まいとは、寝る場所であるだけでなく、食う場所でもある。

その安全な住まいを求める難民がアフリカや中東からヨーロッパへ大移動している。この夏、フランスとドイツにいたのだが、特にドイツでは「難民申請80万人」といわれており、大都市だけでなく地方都市にまで一時収容所が作られ始めていた。大災害後の避難所のような空間に、アフガニスタン、シリア、イラク、エリトリア、リビアなどさまざまな土地から紛争や圧制を逃れて、命をかけて陸路・海路やってきた人びとが混住している。

滞在した大学町にも収容所ができ、その近くのディスカウント・スーパーでは「イスラエルから輸入されてる野菜は買うべきじゃない」、「でも安いよ」などといったアラビア語の会話が聞こえてくる。レジ横にいかめしい警備員が配置されるようにもなった。しかし、よく見ていると、その警備員も移民の背景をもつ人であり、ドイツ語はおろか、英語も片言しか話さないニューカマー難民とレジ係のあいだで通訳をしてあげている。まさにコンタクト・ゾーンである。

(山中由里子)

## みんなぱくをもっと楽しみたい 人のために—会員制度のご案内

### 国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんなぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

### みんなぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます(特別展示は観覧料割引)。他にも、みんなぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

### 国立民族学博物館キャンパスメンバーズ

みんなぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。

詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。  
(電話06-6877-8893/平日9:00~17:00)

### 次号の予告

特集

## ミステリーに挑む

## 月刊みんなぱく 2015年10月号

第39巻第10号通巻第457号 2015年10月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1  
電話 06-6876-2151

発行人 池谷和信

編集委員 山中由里子(編集長) 河合洋尚 菅瀬晶子  
丹羽典生 丸川雄三 南真木人 吉岡乾

デザイン 宮谷一 長岡綾子

制作・協力 一般財団法人千里文化財団

印刷 能登印刷株式会社

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に  
お願いします。

\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

### 交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんなぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんなぱくフェイスブック

<http://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

みんなぱくツイッター

<http://twitter.com/MINPAKUofficial>

